

2023年 2月 19日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「赦され続ける命」 ローマの信徒への手紙 5章1-21節 森田信義

信仰によって義とされて

5. このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ております。2. このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。3. そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、4. 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5. 希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。6. 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7. 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。8. しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9. それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10. 敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11. それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとします。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

アダムとキリスト

12. このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。13. 律法が与えられる前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪と認められないわけです。14. しかし、アダムからモーセまでの間に、アダムの違犯と同じような罪を犯さなかつた人の上にさえ、死は支配しました。実にアダムは、来るべき方を前もって表す者だったのです。15. しかし、恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら、神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです。16. この賜物は、罪を犯した一人によってもたらされたようなものではありません。裁きの場合は、一つの罪でも有罪の判決が下されますが、恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても、無罪の判決が下されるからです。17. 一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになります。18. そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。19. 一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。20. 律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためであります。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。21. こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。

説教においては、最初に、新共同訳聖書、聖書協会共同訳聖書や口語訳聖書、その他を参考にして、本日の箇所を、私なりに解説しますが、その記載は長くなりますので、ここでは割愛させていただきます。その上で、5章から、いくつかのことを、学んでみたいと思います。

まず、第一は、イエス・キリストの贖いを信じることによって義と認められる論理です。前回説教の4章では、神が義と認めたアブラハムの信仰と行いにおいて、物理的割礼の有無は、本質的な意味を持つものではないことをパウロは説明しました。パウロがまだ行ったことのないローマの教会の信徒の中には、ローマ在住のユダヤ人たちがいました。ですからパウロは、パウロの福音を説明するのに、ユダヤ人が聖書として大切にしている旧約聖書の特にモーセ五書の創世記に記載されているユダヤ人の祖アブラハムの信仰と行いについて説明していますが、本日の5章でも、創世記のアダムのことが述べられ、最初の人アダムが持ち込んだ罪と、イエス・キリストの贖罪による救いを対比させて非常に論理的に語っています。

パウロは、イエス・キリストの贖いを信じる信仰が、決して、ユダヤ人たちが信じてきたユダヤの歴史や教えと異質なものではなく、繋がっていて、罪の起源と同じように、救いの起源が、イエス・キリストの贖いにあることを述べています。ここでパウロは、まだ行ったことのないローマの教会の信徒たちに、熱心に、パウロの信じる福音を、出来るだけ理解できるように論理的に述べていて、まさに旧約の罪に対応する形で新しい救いの論理が展開されています。但し、ここで大切なことは、前々回の第4回目の説教「神の論理と人の心の接点」で申し上げましたように、パウロの説く福音の論理を、頭で理解し納得しても、それだけでは信仰とはならず、救いはありません。信仰とは、私たちの生き方と関係し、魂の救いと関係する心の問題です。私たちの心が、福音を自分自身のこととして、涙して、感謝して心に受け入れなければ、ただの論理であり、理屈であり、お話です。このことが、一番、肝心なことではあります。5章でも、アダムの持ち込んだ罪と対比してイエス・キリストの贖罪による救いを、論理的に語っています。

第二に、5章の3・4節に、良く知られている言葉「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」という言葉があります。私は、関東学院教会の夕礼拝で、コリントの信徒への手紙二について、2019年5月より、5回に渡って説教させて頂きましたが、パウロがコリントの信徒への手紙二を送った目的は、パウロがその基礎をつくったコリントの教会にパウロの使徒としての資格を疑問視し非難するユダヤ人キリスト者の指導者が来て、パウロには、使徒としての資格がないと言っていることへの反論であります。この書の中でパウロは珍しく、パウロの個人的なことについて、多くのことを、語っています。

その中で述べられているパウロ自身が受けた苦難について、長いためここに記載することは割愛しますが、11章23節から28節に、詳細に書かれています。それを読みますと、パウロの言う苦難は、机上の理屈の上での苦難ではなく、まさに

パウロの体のあちこちに その痕跡が残る、実際にその身にあつた身体的苦難、精神的苦難なのであります。また、現在に生きる私たちにも、多かれ少なかれ、苦難があります。この世で生活するということは、物と時間の制約の中で生きるということです。必要な物がいつも手に入るわけではありませんし、いつ何時までにこれをしなければならないという時間の制約の中で生きています。したがって、毎日、毎日いろいろな問題に突き当たります。また、自らの生活を顧みても、時に、何かを忘れたり、ミスをすることがあります。毎日、何人かと、また、いくつかの組織と接して生活していて、お互いに考え方も違い、お互いに忘れもし、ミスもする人間や組織と接しているわけですから、毎日いろいろな問題と出逢います。その時、その困難、苦難を、ただジーと我慢して耐え忍んでいさえすれば、練達を生みだし希望が生み出されると、パウロは言っているのでしょうか。そうだとすれば、それは人間の単なる「修行」です。私は、先ほどの「聖書の解説」の時に、「神の存在と、イエス・キリストによる神の愛を信じることによって、苦難は私たちに、祈りつつ神の働きを待つ忍耐を与え、その忍耐は、この世を、信仰をもって歩むことの練達を生み出す」と読み解きました。ただ耐えて待つのではなく、神の存在とイエス・キリストによる神の愛を信じながら、祈りつつ神の働かれるのを、忍耐をもって待つのであります。そうすることによって、この世を、信仰を持って歩むことの練達を生み出してくれるのです。そしてその練達は、神とイエス・キリストによる希望を生みだしてくれるのです。このように理解しますと、イエス・キリストによる救いは、皆、等しく同一に成就するのですが、苦難→練達→希望 の信仰者の信仰生活の深化のプロセスは、個々人の困難の種類や状況も違いますし、個々人の祈りや、神の働きを待つ姿勢も異なりますので、ここでは「練達」とひとことで表現されていますが、それは画一的なものではなく、個々の信仰者に、特徴や深い味わいが備わっていくことが理解できますし、信仰生活の奥深さを感じます。第三は、5章の最後、21節に注目してみたいと思います。恵み、これは、神とイエス・キリストによる恵みですが、この恵みも、信仰による義によって人を支配しつつ、私たちのイエス・キリストを通して永遠の命に導くのです、とあります。この恵みとは一体、何でありますか。それは、罪を悔いる者に、神の御子が、その人の罪の贖いとなって、罪を赦すという「信仰による義の恵み」であります。その恵みは、イエス・キリストの贖罪の義によって、私たちを支配してくださる。すなわち、私たちが、神の前に、罪を悔い、イエス・キリストの贖いの犠牲を信じるたびに、私たちの罪を清め、罪から救い、新しい命を与え、永遠の命に導いてくださると言っています。ですから、キリスト者とは、イエス・キリストによって、「赦され続ける命を持つ者」であります。

パウロが、まだ行ったことのないローマの教会の信徒へ、パウロの新しい福音を伝えようとする思いを、少しでも、皆様と共有出来ましたら、幸いです。